
その声は消えない

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その声は消えない

【Nコード】

N3639T

【作者名】

やしろ

【あらすじ】

『人間にとって一番悲しいことは ことです』この空欄を埋めてみましょう、という話。

(転載したものです)

生きているあいだに、いったい何回「頑張れ」って言われるんだろう。

グラウンドから聞こえてくる運動部のランニングの掛け声を聞きながら、ぼんやり考える。

ファイ、おーっ、ファイ、おーっ、ファイ、おーっ、ファイ、おーっ。

窓を開けているとはいえ、校舎の中、しかも3階からでもはっきり聞こえてくるあたり、掛け声だけでも相当体力を使うんだろうな。少し前までは私も、グラウンドや体育館近くから吐き出される掛け声の一部を担っていたことを考えると、なんだか知らない場所に来てしまったような気持ちになる。ここは、なんて静かなんだろう。

「いつも手伝ってもらってすみませんね、三笠さん」

安曇先生の声で我に返る。

「プリントを冊子にするのって、けっこう大変なんですよ。なんせ、受け持つ生徒全員分ですから。この作業だって、三笠さんが手伝ってくれなかったら僕、また電気の消えた学校に居残ることになっちゃいますから」

安曇先生はそう言って、頬をかいて照れくさそうに笑う。

「なかなか怖いんですよ。夜の学校」

もうすぐ定年を迎える年齢のわりに、安曇先生の仕草はなんだか可愛らしい。

生徒にも丁寧な言葉で接したり、説教くさいことを言わないあたり、あまり先生という感じがしない。

「気にしないでください。私、社会係だし、今は放課後暇なんです」
会話しながらも、お互い作業はやめない。プリントの束を整えるとなんとかという音と、ホチキスで留めるぱちんという音が規則的に教室の静けさを際立てる。

「社会係というのは、やっぱり社会の授業を補佐する役割なんですか？」

こうして定期的に先生が振ってくれる話題のおかげで沈黙が続かないことはありがたい。

静かだと、どうしても意識は窓からの声に向いてしまう。それが嫌だった。

「そうですね。国語係とか数学係とかもありますけど、やることはだいたい同じなんです」

「雑用、ですか」

安曇先生はきまり悪そうに笑って、白髪がわずかに残るだけの頭をぱりぱりと掻く。

「すみませんね。高校生にとっての放課後は、僕の時間なんかよりもずっと貴重なもののに」

「いえ、私、本当に暇だからいいんです」

小柄で皺だらけの安曇先生が肩を落とすと、本当に小さくなってしまふ。なんだかすごく悪いことをしたみたいで、必要以上に慌ててしまふ。

「それに先生、いつもこうやってプリントを束にして配ってくれるの、とっても助かってるんです。テスト前とか、見直しやすいし」
安曇先生の担当は倫理だ。

いろんな思想家たちの持論をなぞっていくこの授業は、興味のない人からすれば、知らない人の恋バナみたいなものだ。はあ、そうですかという感想しか出てこない。

そんなわけだから、授業をそもそも聞かない人も多いし、安曇先生も居眠りや上の空状態を咎めるタイプではないのも加わって、テスト前にこのプリントだけを頼みの綱にしている人は多いのは本当だ。先生はそんな実態を知ってかしらるか、「テストねえ」と小さくため息をついた。

「三笠さんはどうでした？この前の倫理のテスト。あれ、僕が問題作っただけですけど、特別簡単に作っただけじゃなかったのに、平

均高かったんですよ。もう少し難しくした方がいいんでしょうかねえ」

「この前のテストですか」

私の点数は平均よりちょっとだけ上だったというだけの誇れるようなものじゃなかったものの、先生の疑問への心当たりはあった。

「先生、サービスしすぎただけだと思いますよ」

「サービス？」

「私の回答、間違ってたところにも部分点ついてましたから。点数下がるの嫌だったから黙ってましたけど」

「そんなこと、ありました？」

「マザー・テレサの格言のところですよ」

マザー・テレサはすごく立派な行いをした修道女、らしい。

わりと最近の人らしく、絵で描かれた思想家が並ぶ教科書のなかで、カラー写真で映っていたところが印象的だった。大層な名前だなと思っていたら、どうやら本名ではないらしい。

『人間にとって一番悲しいことは

ことです』

この空欄の部分を埋めよ、という問題で、彼女が生前に残した言葉らしいものの私にはさっぱりわからず、適当なことを書いてしまった。

「ああ、あの問題ですか。三笠さん、『答えがわからないこと』って書いたんでしたっけね」

「よく覚えてますね」

素直に驚くと同時に、すごく恥ずかしい。

テスト中のあのときは、たしかにその空欄を埋められないことが一大事だったのだ。だから、私の回答は正直な感想ではある。それだけにすごく恥ずかしい。

「あれくらい、サービスには入りませんよ。だから点数引いたりしません。だって、的外れってわけじゃありませんでしたから」

安曇先生の親切な言葉に、私はそうですかと言って頷くべきだったんだろう。なのに、出てきた言葉は全然別のものだった。

「本当に、そう思ってるんですか」

私の言葉は、強弱のない音しかないこの教室のなかでは、とても異質に響いた。

一番悲しいこと。その言葉に、呼び水のように私のなかの何かが吸い寄せられる大きな流れを感じて、声が震えた。

なんでだろう。胸の内側から蹴飛ばされるような感覚に、息が苦しい。

何かが出たがっている。

表に出ずに息をひそめていた言葉が、私を内側から食い破ろうとしている。

「私、あれから教科書見直したんです。正解、見ました」

「ちゃんと復習したんですね。何て書いてありました？」

プリントをまとめる手を止めて、先生は私をまっすぐに見た。急に取り乱した私に驚くことなく、とても穏やかな目で。

「自分が、誰からも必要とされていないと思ってしまうこと」

息継ぎをした。出した言葉に乗って、自分の内側にあった汚くて嫌な部分のすべてが目の前に現れてしまいそうな衝撃に、体が震えた。

「私、この言葉を読んだとき、本当にそのとおりでと思ったんです。だって、これは」

私が、そうだったから。その一言は、言葉となって出てこなかった。ラストいっぽーん、がんばーっ、おつかれーっ。

グラウンドからの声が、やけに大きく響く。

その声が私に向けられたものでないことに、なぜか無性に泣きたくなった。

「部活、休んでるんです」

脈絡のない私の言葉に、それでも先生は聞き漏らすまいとしてくれていることが、俯いていてもわかった。

「ちょっと前まで、入ってたんです。バスケ部。ヘタだからレギュラーとして試合に出たことなんてなかったけど、それでも楽しかったんです。だんだんボールが手に馴染んでいくのがわかるのが嬉し

かった。パスがうまくつながるときが好きだった。楽しかったんです」

流れはどんどん威力を強めている。

「でも、ちょっとした拍子に足を痛めちゃって。致命的な怪我じゃなかったんですけど、どんどん置いてかれました。実力も、それから」

少しためらってから、「みんなとの関係も」と付け加えた。

口にして、自分で認めちゃった。

とうとう誰にも見せまいと守ってきた、私のなかの最後の砦が崩れたのがわかった。

「おかしいんです、私。遅れを心配してみんなが頑張れって声をかけてくれるたび、ありがとう頑張るからって笑顔で返すくせに、ずっと思ってたんです。もう頑張りたいくないって」

グラウンドからの声は、もう聞こえない。ひたすらに静かだ。

音がないということは、こんなにも心細いことだったつけ。

「走っても、汗と涙の区別がつかなくなるくらい走っても追いつけないんです。あとどれだけ頑張ればいいんですか。頑張れば、いつか報われるんですか。疲れたって言っちゃ、いけないんですか。立ち止まりたくなることは、卑怯なことですか。そんなことないって思っていたのに、もう自分に言い返せないんです」

頑張れと応援されるたびに、背中を押される気がした。

退路からどんどん遠くへと押し出されて、ただ前へ前へと、みんなが正しい道だと信じる方向へ。

疲れきって歩けなくなるまで、それは続いた。気付けば、どことも知らない場所に、私は一人で座り込んでいた。

「わかってるんです。目標に届かないのなら、もっと頑張るしかないって。実際にそうしている人はたくさんいて、みんな弱音に負けずに努力し続けてる。ただ、私は、言っただけだったんです。頑張ってるねって。届かないこの悔しさを、わかってほしかった」

これじゃ、子どものわがままだ。自覚はある。

でも、私がたしかにそう思ったことは確かなのだ。

「自分が悪いなんて思いたくない一心で、だんだんチームメイトを恨んでることに気付いて、すぐくわかった。どうすればいいのか、わかんないんです。ただ、逃げ出したかった。チームメイトを嫌いになっていく自分を、これ以上嫌いになりたくなかった」

何だかんだと理由をつけて、結局は自分が傷つきたくなくて、それでいて認めてほしいと期待して、それがダメなら他人を恨む。こんな最低だ。

わかってる。そんなの、わかってるよ。

「部活から離れてみて、私なしでもちゃんとまわっていることを知ったときは、ちょっと笑いました。私一人の空回りなんて、周りにとってはどうでもいいことですもんね。それだけのことなのに」必要とされていないように感じた。そう言おうとして、喉が詰まった。

同時に鼻の奥がつんと痛んで、両目から次々と涙が落ちる。

他人が許せないとか、そんな自分が許せないとか、そんな行き場のなかった気持ちは、狂暴なまでの感情のうねりに流された。音のなくなった私のなかでは、ひたすら一つの声が響く。

どうして、と。どうすればいいの、と。

それは、何かを否定するために声を張り上げてきた感情に、今までずっとかき消されてきたものだった。

一番深いところで、ずっと叫び続けてきた、私の声だった。

わからないの。どうしてこんなに何かを欲しがってしまうんだろう。突き放したいくせに、いつまでも縋りついてしまうのはなんでだろう。

わからないよ。

「本当は、わかってるんじゃないですか」

安曇先生の唐突な言葉に驚いて顔を上げる。俯く前と同じ、穏やかな目とぶつかった。

「答えがみつからないことが悲しいと、テストでは答えましたよね

？でも、三笠さんには、もう自分の気持ちがわかっていようだ」

「・・・どういう意味ですか」

意図を汲みかねている私に、先生はのんびりと語る。

「自分が何を考えているのかわからなくなること、僕にもよくあるんですよ。怒っているのか、悲しいのか。誰のことを責めたくて、何にこだわっているのか。自分のふがいなさを嘆いていたはずなのに、いつのまにかすべてを棚に上げて、自分よりもダメなやつはいくらでもいると見下しては安心しようとしていたり」

数えればきりがありませんよと言って、先生は笑う。

その笑顔があまりにも寂しそうで、この人は私よりもずっと長い時間を生きてきたんだと、ふいに思わされた。

「自分の中には、本当はたくさん人間が住んでいるんじゃないかとよく思いますよ。僕を責める声も、庇おうとする声も、全部自分の中から聞こえてきて、それぞれが好き勝手なことをてんでに叫ぶものだから混乱してしまいます」

静かな教室には、開け放たれた窓から入ってくる風だけが、外の世界に音があることを私に伝えていた。

「自分の核心、つまり本音ですね。それを探し出すのって、とても難しいんです。100人が一斉に別々のことを叫んでいる中から、たった1人の話していることを聞きわけることと同じくらい」

頷いた。自然と、そうしていた。

「三笠さんには、もう自分の声が聞こえたんでしょう？」

安曇先生の言葉に、また頷いた。何度も頷いた。

「わからないって、言ってるんです」

私の声は震えていたけれど、それはさっきとは違い、生まれたばかりの生き物があげる産声を思わせる力を感じた。

「私はただ、好きだったのに。部活が、みんなが、好きだっただけなのに。わからないって。どうしてこうなっちゃったんだって」

ああ、と息をついた。

これが、私の感情の芯だったんだ。

認められたいのも、誰かにわかってほしいのも、責めてしまうのも、必要としてほしいのも、理由はすごく単純。

すごく単純で、一番強い気持ちは、これだったんだ。

「好きだから、それだけだったんです」

音が聞こえる。心臓が、私を叩く音だ。

すぐにでも向かいきたい場所へと、私を急かす音だ。

「三笠さん、お手伝い、どうもありがとうございます。もう行ってください」

安曇先生は、まだ束ね終わっていないプリントを私から隠すようにして出口を指す。

「あなたたちの放課後は、僕のそれよりもずっと貴重だ」

私は息を吸い込んで、一瞬止めたあと、先生に頭を下げて教室を飛び出す。

ただ走った。みんなが練習している場所へと、私の中の声が急かす場所へと。

(後書き)

書いていてこんなに疲れたのは初めてです。読んでくれた方、お疲れ様でした。

自分で考えていることがわからないなんておかしいと思いました？でも、実際にそう思っている人間もいるってことが伝われば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3639t/>

その声は消えない

2011年5月19日09時42分発行